

北越奇談

三

104

北越 奇談 卷之二



北越 崑崙橋茂世述

東都 柳亭種彦校合

玉石

頸城郡 采山の西三里に土底とす濱あり此所の漁夫  
 三四月のる鱸魚場とすりて采山の海岸とすりて  
 八九里仇州 荻のるの足波に舟を放ら網とすり  
 釣とすり野あり凡此海底数十百の下少一小さい島  
 のりて奇本奇石を生とすとのけて善人べりぞ赤珊  
 瑚黒珊瑚青白琅玕拂子石木賊石海松海柳ホナリ

北越 卷之二

尤の四とるごとく黒珊瑚海松の類に常に赤一実支止  
 合浦ともつらづき野あり漁舟の網にかりて根より引ぬけ  
 てのぐるめのおろしとらぬ山成とすともまら水垢はく色  
 もつらど白ひのくもひもとるべりづらど清水  
 ひらりと洗ひ日に乾とすとも潤色光沢其奇つべり  
 又自然に大凡波のくあらちぎれ赤りく淡に打あげ砂  
 石のくらは拾ひゆるめん殊に光沢絶妙なり拂子石琅  
 玕木賊石の類に稀にわがる赤珊瑚のくまら今絶てま  
 とりり十ヶ年前まがら教示同く漁夫の網にかりわがる  
 とくども其奇也なるとけちとる皆海底にうちとてり

其折そのかりまうぐいなるましくせきしやく赤色あかあるものありことなり其後そのごぬる  
 の者もの漁夫いさなの詠よみ成なて是こゝを以もつ後のち亦またるいり今いま舟ふね下くだれむ  
 としども其その心こゝろ人ひとをまかゆ人のゆゑとわごとし故ゆゑに價あひもま  
 する一ひと種しゆ俗しやくに薩さつ大たい貝かいとよむあり玉石ぎやくせきの類るい一ひと琅らう玕かんに似にき  
 とも光あかり沢たくなり形かたち屈くつ曲まがともましく不かた雅うぶとむり小こ浅せん出でる時とき終しま紅こう  
 りしく爰あゝとべ一ひと凡ふつ五ごの曝さつらるとまゝに即まづ白しろ一ひと總もつて珊さん瑚こより  
 以下いげ皆みな海中ちゆうのあり中ちゆうのありしして玉石ぎやくせきの類るいのありざるが  
 小こ浅せんなるれ乾くわんくとまゝに即まづ金石きんせきのどし予あゝは公こう海かい浸しんれ年としぐ  
 玩あそぶ己おのれに五ご六りく品ひんを以もつ好このむの客きやくにけけるの其その余あ北きた  
 海かい教きょう十里じゆりの深ひんく稀まれに公こう奇き本ほん玉石ぎやくせき浅せん拾しゆひゆるとありとよむ  
 北きた越こ卷まき六む二に

凡ふつ波はのよりに打うちあぐるおのりく海底かいていより並ならに引ひあげま  
 へのじとむらひ

珊瑚さんご 淡紅赤色光綵洞沢根石付  
 のとあろ少すく黒く其上そのかみ淡緑  
 次才つぎの赤色



青白琅玕 二種

光綵可愛

石上の生



木賊石 清白里節

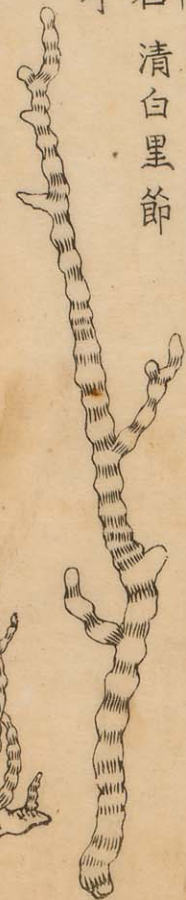
似琅玕

奇玩

絶品なり

一 根數莖うらゝめ

玉林のこゝ



黒珊瑚

光沢潤色

人々てき



北越卷之三

三

海松 一 欽樹

潤黒色葉

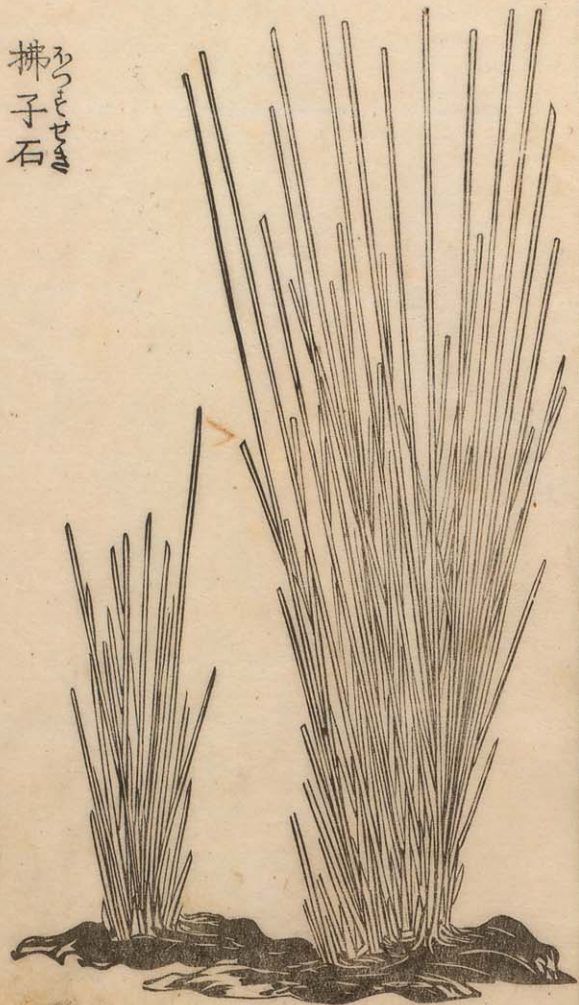
似榧少く

きり



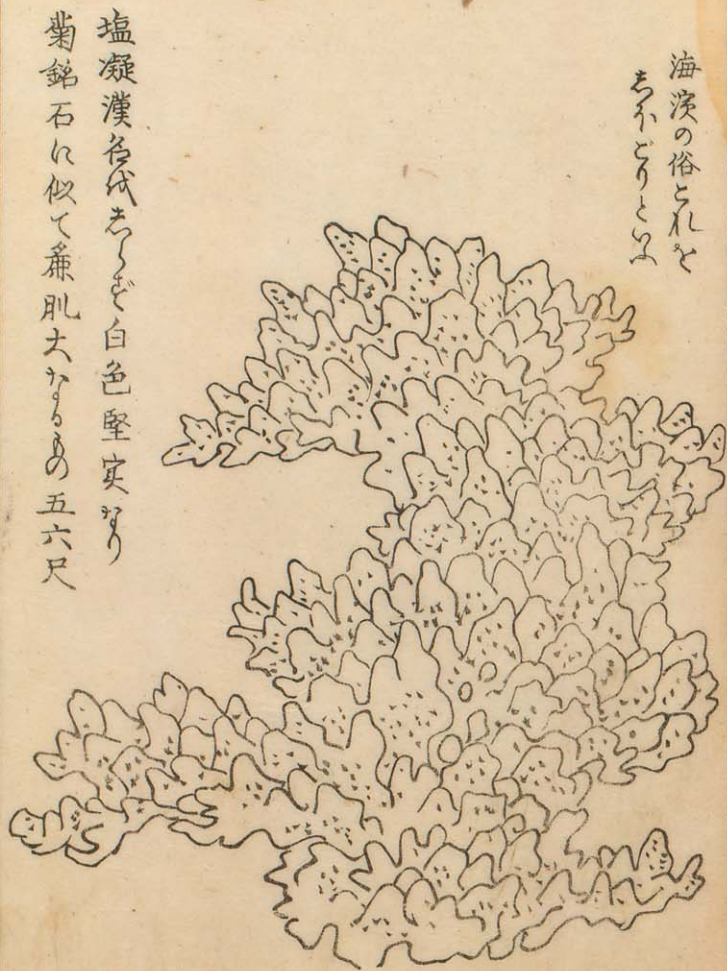
海柳 葉細長





拂子石  
わつとせき

一根数百莖を生ト長物二三尺短もの四五寸丈も  
も銀針白玉鮮潔なるを賢実にして折すに机上の絶玩なり



海漢の俗とれど  
ちかどりとく

塩凝漢名成ちかどりとく白色堅実なり  
菊銘石に似て兼肌大なるもの五六尺

琅玕の類う山中石髓  
乳石盤の類う

其大なるもの

二と尺



俗に薩大貝と

称するの水よ

わるととき冷紅色

日の曝すとくまら

淡白堅実なり

北越巻之三

五

其二

浦原郡河内谷の奥陽圓寺より東南一里山谷の間流よ  
 るてつらつたがねの石の  
 水昌石と云ふ一商家某なるもの其石の正白  
 色にして其石をりあるも山はゆるがどくまら成以つおよ  
 推まの米五升をのえりて其奇石なりと云はれ  
 と云ふも又つんともその石は試に鉄槌をりて石頭を  
 打くと是れ穴を穿んとするに誤り西漸と云ふも忽ち石中



三宅村赤磴の峯砂土一るんくはて海磯のどくは一るん  
のる貝石数万とあり香川啓益の造化の然る呼ば類子  
と云予が四寺泊沢丸山氏越後名寄の尾山山中自然  
の物うらぐ海中の貝売凡るにさうもさうも皆化し  
不見えあうれば石とかり理ありと云まど其説不明之今  
新に海底の枯貝売を以日に晒しるに湯さぶ湯さるも  
あり山中にあり所ら上古土中に落入しる貝売され凡る  
にさうもと云格別あり又貝原先生大和本艸に渾沌未分  
前世界のもの可見と云う是又篤信の博識の公方便に近  
き説と云う世界の變化一るんく子に天あり刃に地

北載卷之三

あり寅人の生もなんど其始とあきううれもこの假説  
に何ぞ前世界と云の理ありん只天地の變化は呼ば  
るれば彼呼落入し海となりさうもと云に定はるけれど  
川の淵と云の所とさるがど只上古人智明うかりと云  
かゆの歴代と不記後人その原をわきううふせんがさあに  
天皇氏地皇氏天神地神など假はるはけさるもさあに  
ハ只上古の人形にさるもの異さるとさるものといは  
ゆされば三皇氏と云も又さうもさるにさうもさる  
人智開よりは後数千年の事と云何ぞ上古人の始と  
かかん天地の變は只さうもさるる智り日に新はる二十年と



歴代が山川道路いづるもどおしくかりしめなりまてる古代を  
さるも勝地同政今只るる所さかじとれが是より後さるる  
てんちちすさうしすや  
天地長久を望まうとぐ桂海虞衡志に石叢石蠶石散瓊  
ホとのぐは類う只く予が圃の貝石の皆上古海磯の産とら  
而くそののく大螺の小蛤と倉の類のりが知くざる所と

其四

本業石の枋尾山谷の河堀の内十日町の山石の雑波山本は  
く出るとその石性初く小して灰白色盆地に入草  
本と植るにゆく水をあげく活く打碎に一片く諸本の葉  
お堂より紋紋志が面白くた多く小魚蜘蛛蛙など乃葉の

北載卷之三

同にわろく石となれるものあり只魚泥形上田郡菰神乃  
庄大湯村温泉のゆる呼月枋尾役村さるく川の奥日根  
川とくは溪流の岸岩の尻より掘出るとの墨色ハ  
堅実なり以硯とすとい堪とす尤は中とかく少くあり  
ゆ之者ハ以珍玩とす

其五

蒲原郡茨曾根村里見氏の庭前に老松十圍するもの  
あり枝々四隣に茂り掩ふく庭中さる陰主人まごを  
はくじ一日僕に命づく伐せむるの中さるく空を  
以板に挽ふるよ土際八尺ほど上りく堀の土の欠換り切斷

まるごと不能野のり終に斧をりて打り見しるに大さ  
あふんぶらこころ  
 鞠のやぐなる青石ありとくまご堂一僕の云是を火打石  
まわり  
 にせぶよあつんと本挽即大斧を以是とくご忽金石の  
あつん  
 ひびき成りて両銃とわも中自然に丸く空野ありて清  
あつん  
 傾き出らんぐ後悔もれども不及可憐十和氏さきこと成  
あつん  
 是ホのよの良工に命とく琢磨せよ必明珠なるまろ可惜  
あつん  
 今をさ是に似しるものあり言傳人源平のむじ五十嵐小文治  
あつん  
 としる者勇力の少へありて即三条五十嵐川の水上矢本  
あつん  
 峯流に臨んぐ数十丈の絶登勝地ありは流にづもて五十嵐  
あつん  
 の神社古本大杉わねく一日小文治は野にあり己が力量を試ん  
あつん

矢本明神



矢木峰



小文治村

五十嵐神社



と大石はゆつゆくは枝に打付く石即枝の中枝に止りて  
 今をを是と見るに其枝根はより一丈をかり上より石の大サ  
 と尺もゆらん其色は長く中く人カ及びべきと云ふ人ぞ  
 是又一奇と称す

其六

出雲の南勝海濱と云ふ所先年海岸の絶壁高き蛟竜  
 一夜出く海上を望み見るに山のうぶまは落くる所水底に光  
 わりて波上に月影をみるがむ村老怪て夜々是を試るよ  
 探燦然たり即勇壯の若者に命づく母は滑舌光につき

山底をうりぬねむしに一塊の白石あり是をいそ家の  
おろし即水上の光不足は石夜々其照席足る人市を  
がと縣令あれと仰て下宦の命借く又ん其致も村  
老辨もるとのめらむを終に是を執りて東武に歸る後三  
年へく其玉石己の光失くく今其家是と  
藏もといひ不茲弄玩實に惜む

其七

新茂田より東北加信中条の百路の傍田乃中の庚申  
塚のり塚の上の丈サ尺立寸ばかりある石は  
是を參りて石その先キ農丈屋後の竹林と掃除して竹

の根とくついかの石一のをぬその色青黒をいそ家の  
のり農丈是をりて葉を打盤とて其夜家婦庭  
に出る光ありく燦然と婦人躑躅かりとて  
叫ぶ家主若者三五人を伴ひありて光る物を打  
石かり皆以怪ありとて石は竹林に捨りて石  
夜々光のりく村中の老若おそれて夜仍る依て  
是を庚申塚に祭り上に泥をぬりて光をかく今  
苔むく荒埃より其地いり村老に乞くかの石  
をぬんとせれども其たりありてはかそをゆるさざ  
又お似く一奇あり前におぐる佐奈志川といふ

嶽の麓大湯村と初尾俣村の百餘ひゃくじゆの山間の清流數十室と  
 めづりその源なるねづねづううががじじ初尾俣の温泉の西峯に  
 わりて村をまわると十町じゆばかり涼き林の中の湯小屋ゆこやの  
 つらのおおきおほきとさささななれれが入浴の人を今もまねまねて只  
 大湯より合せ湯にわたりわたりなりがとく大湯へ村中よ  
 わりく百餘十人ひゃくじゆと浴ゆとぐとぐは熱ねつの湯なり又川岸の滝の  
 湯ゆの足あしへ冷ひやわり熱ねつの疝せん気き頭痛づうづう打うち才さい癩れん氣きを治おとす  
 疥癬せけん濕しつ瘡そうを治おとす即農家に入浴の人を宿やどくささるるに不  
 自由じゆうなることことはは繁はん花かととふふののああららががれれども困かん法ぽうのの景けい  
 色俗しきよくなるなるごとごとはは川中かんなかの一ひとととせせ夜よのの湯ゆ也やせせらら水みづ中なか一ひと臭くさ乃なり



駒ヶ嶽

佐奈志川

枳尾温泉



白蓋山

○大湯村  
温泉



光ひかりのりてむのりに又また西にしとてかみかみ螢あぶらえんどの水上すゐづかみに止とどまると見  
 へみが教しよ回まわりて野のをうらささどどああと十じゆ余よ日にち一いつ日にち又また立たち乃のち  
 のめのめにに洪こう水すゐ俄がににああり終しまひその光ひかりを矢やとと其その後のち五ご六ろく丁てい川がわ  
 下したの山やま中なか又また一いつ点てんの光ひかりのりくく暁あけくと夜よの半はん乃のちにに懸か  
 むむの事こと只ただ是こゝををああららむののいいくく又またああねねむむののかからら  
 惜おむむげげ其その秋あき又また洪こう水すゐ俄がににあありつつねねにに其その所ところ在あるるをを失うせせとと言い  
 りいままれれのの目め山やま中なか正ただ愿ねがひひのの事ことはは活いちちををううととががいいののあありり  
 疑うふふべべききにもにもああららむむどど比ひ予よががどどもも好この事ことのの客かつつううががああららむむ  
 とと見みゆゆぎぎるるとと成な珠たまににをを食く夜よ識し金かね銀ぎん氣きとと是こゝににががああららむむ  
 不ふ幸さいとといいふふべべききののしし



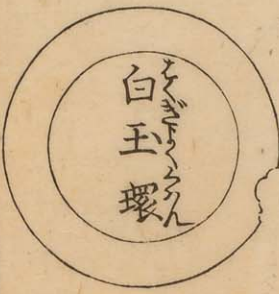
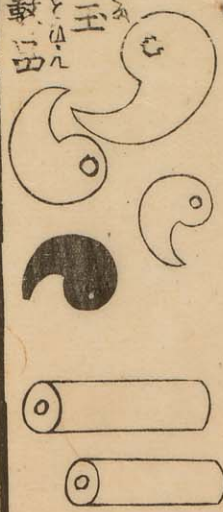
其八

柏崎の西南海峯にのぞくと三十番神の社のありて  
 此山の禁を握りて一ツの壺はゆるめあり内皆赤土是  
 て海潮にのびび其内白玉環一雙勾玉管玉ホ教品有  
 皆小児未だにけりけりて後知れる者あり漸くこれ其品  
 五つ六つをゆるると久き其余呀在を矢とおしむるま  
 きちり予た多く是をゆるに青緑白色奇玩絶品なり  
 密に按ざるにけりて帝都の乱とさけて貴人け北  
 越へのれとあるめまわし今その系跡さだまらざ  
 としども是ホホ其人を葬る地なるべし

其九

寺泊より東一里竹森とて呀古ま岩の跡ありて角  
 槽とおがき呀丸さく方なり此村の中路境などいた  
 損ざるともふかありて其槽の土とてりて是とおまら  
 ともてあら土中深く掘りてあら白玉の勾玉ひとつ出  
 ともて常に入るとりて大なり後其ゆるりもの東武に  
 てあれを失と 管玉二種

勾玉  
 戦二五



古鏡 徑八寸 畧圖

背文

樂器

のど

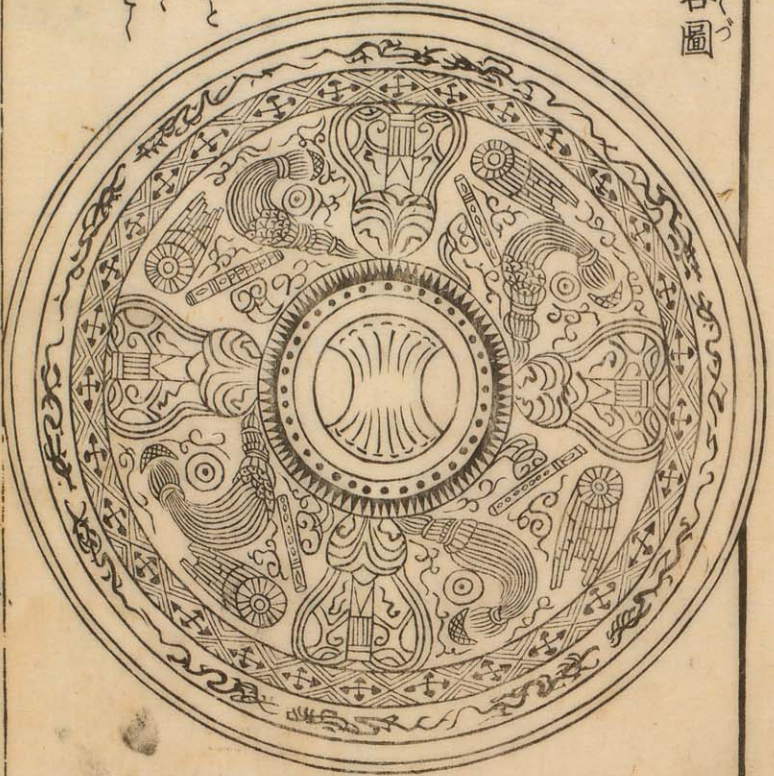
鏡面緑結

地が後の

つら

俗に宣位銅と

つら



其十

伊夜日子神社北一里竹の町村は野苜蒲の觀音とつるる在  
 其鏡つらつら古跡なり四面竹堂鬱然とつらつら幽遠を  
 みる毎年三四月は竹を伐とまらかりつらつらるるそ奥に院  
 あり院のまじり山の中流に苜蒲塚と名付るもの方五六回  
 四面をサ一丈五尺又其下は猪ノ隼人の塚あり方三四回  
 一丈をかりつら高倉の乱に頼政戦死の後臣隼人苜蒲の  
 前を供奉つら北越に落下り後には地に葬ると又傳へ  
 るつら入あつて密にかの塚とのまじり内只一小餅古鏡一面  
 わりつらぬは是を市に賣るお侍つら其古鏡は今予が友和述

塚谷江氏の家に藏む其鏡徑八寸背文無器面地金のくく  
つまぐ水銀を下さざるがじ最唐鏡く小餅へ今呀在を失そ

其十一

竹の町匠村揺上とつる呀の享保のちろ農夫某とつりの  
一日葱をうゆ忽鍬のおれあさる音のり老ま即金ううん  
かゝ密に是を掘れば一壺をと教十竹ううののり土を松  
て内と入れば金光眼を射るがどく爰に鶉夜をりつこれ  
とほく家にかゝるくゆ藏貯入とくとも皆異形ゆ  
用由ぐま呀なり偶予が父の二片と半をりつ今金の交易  
と代りとも父其金位よりがまきとらく是を新浮何某に

かゝる其金又あると代ちりど老まのつ只は二片のこれ  
く妙も呀るくと其金異形左の必と

其十二

天明六丙午菊羽羽五目市村の貧民某一男子ありと  
むも家妻なるがゆいもぐく東武にありと己に年  
只老ま母家のありく農の代つとむそ子を匠んと成然れ  
とも不能茅屋のまに只一丈梅樹ありされと切く蔀と  
るゝ又その根をあるは御物のありく西新とらるる  
あひく是をるるは金光燦然より凡十有五枚老まその  
金ううと代ちりど寺僧にありとをりめく其金ううと

こころしく領に領主の上も成るまれの通金数百金賜ふ  
そののちさうさ  
しつり其異形丸に必とるどし

其十三

明和年中三島郡のちら金銀敷正代地中に掘ゆる者在  
その金銀異形丸と云るとしとまそ人秘しく不取  
丸にちるると又寛政四壬子に田関町とつるはく古銀  
一片をわり出と者あり其形文丸のど  
只成二必の友人某が  
必記しき儲れる事

其十四

古銀を去中よりわり出ると所これありとつとま  
二三百乃至一二や文のどさぎど安永年中蒲原郡  
あ人多秘へちり  
か人どとちり  
あか

北越巻之三

とつる所はく耕して泥中に古銀一壺をほ九十やどあり  
皆永樂より文化三丙寅頸城郡南新保村農夫某田  
とわりと古銀五やとつるそのちら古金銀法まじりあり  
しつとつれどもそ実をろとど銅法へ皆洪武永樂熙寧  
ホなり予偶寛政四壬子の契仔夜日子のちりく岩室の温泉  
に浴く数日逗留せし隣村福井村村行某しつる深底あり藍の  
桶とつづむとく古銀とる大サ幅三尺長サ一尺五寸あり箱乃  
形はく只一塊にあらまうとつるその数つるどつと成るど  
めはの二つありとつるにちりく斧とりつと打つとつと秋子  
兄才たつ密に櫃とりつて銀紙をとり多るに百法とつる



上二

重十八匁

同十八匁  
京

無文金  
二十九匁四分  
十九匁四分  
十三匁四分  
十二匁二分 二枚

上

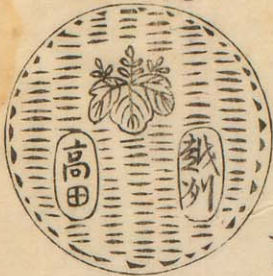
同  
二十一匁五分

同形無文ノ金五枚  
只同カチの相違あり

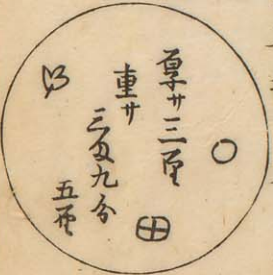
三島有得の者

高田小判と共三枚

表文



背文



上枚謙信鑄之

北越卷之三

十九

銀



御藏花降銀  
重廿二匁  
形不定



新浮銀

柏崎

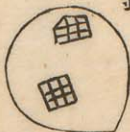


村上銀  
此品皆  
切てはる



糸魚川

高田関町古銀



重廿  
二匁五分

徑八分



徑六分五厘



徑七分余

文字あり



徑七分

文字手あり



福井村古銀ノ内珍銀數品

二字 篆文



小銭

徑六分余

二重輪 徑八分

中銭

門一寸二分余



中銭 徑一寸二分



徑八分余

一品たましく中銭まじりそのうち珍と称するもの

必のどろ 大半兩一徑八分 小半兩二三銖一布泉二五銖四

建炎元寶 二字篆一 紹興通寶 小形一 中銭八 乾重元寶 輪

一開運元寶一淳化元寶 文銭一 嘉熙通寶 門一 嘉定一

北越卷之三

十六まづぐ 其餘数あつるいとのものど皆唐銭のとい

とて和銭ハ一ヤもみー永樂のりりともめと尺へくやそり

目のまじりふ多し然れば五百年前の乱をさけ他邦に

走らぬものを埋めしりとむむ

其十五

松の山浦田口村山氏所藏の石鯉圍一尺余頭の方半尺二寸

かとのめらん 鱗板貫全くそるり 金黑色文の一とせ

山の峯片かけ落く谷れ入一推まわりその呀のむく

作きこるるもむららる所数十丈上の金色の物日に映して

尺五推ま即黄金なりとてひとり 是をひんと欲れた

たすくくたぶ〜〜と漸く〜〜と上りて呀のつれが片はと  
ふ〜〜と己にあらんと〜〜と其のあら〜〜と力を出し其れ  
さつ〜〜とればかの金色なりがさ〜〜と出さる土まらり折  
是とたに谷に落しりぬりひたる呀の物と又れば即  
魚のからの方半より折らなり 其後好りのめその尾  
の方を掲りゆ〜〜と今彼の家の蔵むと〜〜と予未是と〜  
金臺紀聞云縣河灘上有乱石石魚長可二三寸天然  
鱗鬣或雙或隻不等とあり此類も〜

其十六

頭城池舟上原氏音穰石と〜〜とおを蔵むその故河貝子

のむく長サ八寸又貝の化石のもの〜〜と自然の孔あり〜  
是を吹に其〜〜と浄る筆葉のむ〜〜と〜〜と〜  
いまの〜〜と以樂器と〜〜とに培り其石紋文かく形兼〜  
〜〜と雅なり 月宮は村池田氏胡瓜石代蔵む外堅実〜  
皮黄赤色を西片を〜〜と内自然に肉白く仁あり〜  
のむ〜 月保町田中氏本賦石絶品なり代蔵む己に込に  
の〜〜と 月梶村田才氏文勾玉三品代蔵む其必石鏃の  
部に出と月高田法町大眼寺に牛額珠あり丸じて少  
平〜〜とあり灰色の毛濃に包〜〜と〜〜と〜  
奇石家〜〜と蔵と〜〜と呀扱百一〜〜と〜〜と〜



只予か圃の産物追て考後編に出土系魚川上出村神社  
その神祇只白玉一双あり誰人のおさめたりと云ふはあつて

其十七

三島浦系の砂境五千石村武久礼の神社今荒れて小社  
其神祇ハハ花形の古鏡なり何れのときも是をかき  
けん近來ハ神を以野中才と云ふ寺にうつると云

其十八

長岡後中島氏の家に秘蔵する野解毒石あり丈さ卵  
色ち黒蛇の毒おび一切の毒を治すと云痛む所は石  
押當れば即毒を吸おしく瘡を治す石以乳汁にひくとせ

北越巻之三

留其毒を吐きおせり是外圃の産その名成忘失と三島郡  
島崎村加名らと云ふもの叔代家に傳つ一塊の小石あり  
その名をまじり血を止るに妙なり諸血皆治と云石  
と疵口につれば忽血止り痛去と云

其十九

妻有郡十日町山中絶壁の下乳石流出と云上流に  
常れと云はる一河内谷より出る所の石髓山岩下に  
あつたり大塊をとりての百蛇おまると云奇怪の形  
へうと云はる内乳石を生じ五泉何某の菴と云所は四尺斗  
圓一圍半尤に堅実にして刀刃の及ぶ所はゆるぎ

色半白ちやくはんぱく山昌さんしょうのくおとれるのかり

其二十

鉢伏山のやうなる夜次第に暮り深遠せんえんとべくくど一日推夫おしうふ  
谷やのりりく茯苓ふくろうをちるよ大塊たいくわいの白石しろいし其色少そのいろま赤あかとく  
赤あかとく五や目ごめをかりりる成なりけり推夫おしうふとくよふかかざれ  
ともそ色の光沢こうさくをりりく是これを携あまよく長屋ながやの市いち  
に賣うる松まつを以もつ某なにかするもの是これを買かひけり弄ろう玩がんするに一  
日浪華なみぎわの商人しょうじん来りて強あはくあれと求もとむ其谷そのやづくると蠟ろう  
石いしとんば以もつて終つひに是これを賤いやる予われ按おんざるに瑪瑙めうぼうなる  
づき可か惜あはれ

北載卷之三

其二十一

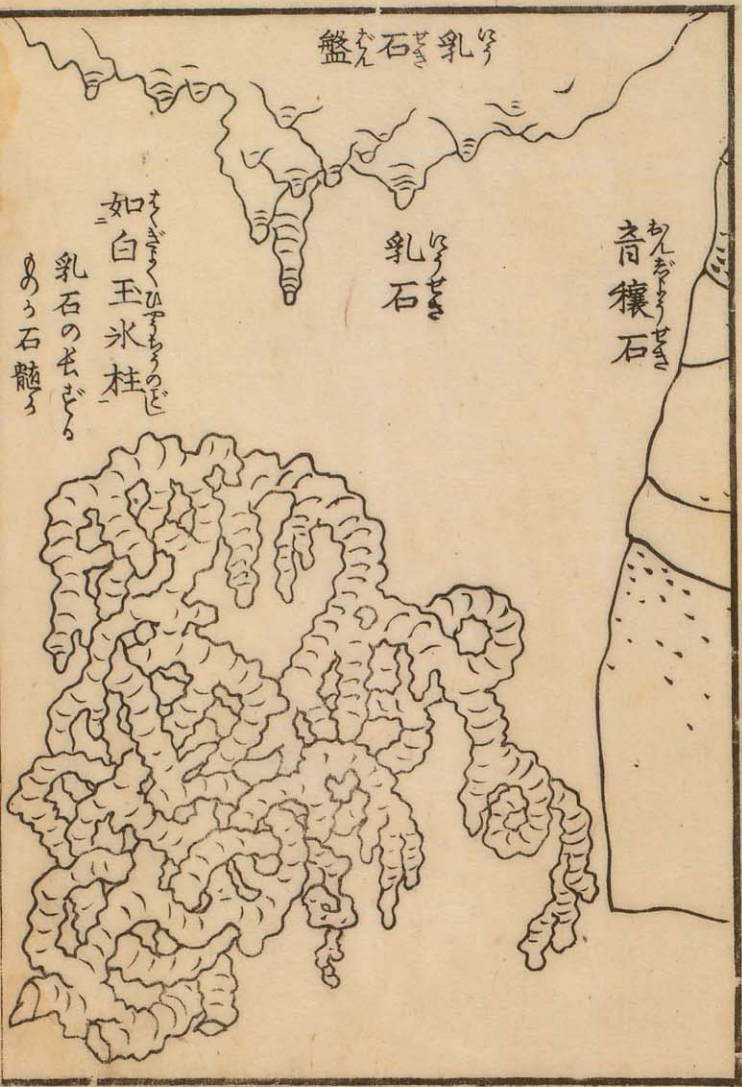
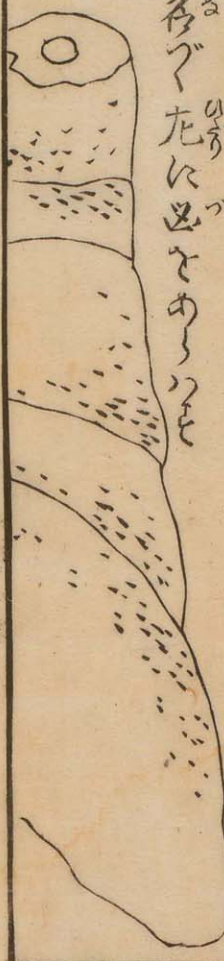
糸魚川いとががより山中九里さんちゆうにく蠟石山ろうせきざんあり山のけり三里の  
頂あたまより谷やにりりく皆蒲萄石ぶどういし色少そのいろまアツクなるがゆへ  
に印文おんぶんをうとふ不堪たふとく又またも潤沢うるせきありり可か愛あひは地ちの人  
是これを切きぬく温石ぬるいしとく一ひと諸方しよほうに賣う亦また以もつ香合肉地かうがにくちと成なり  
作つくる予われ予われもざ山やまに持もつる暇ひまらり其その上かみあるる所ところに  
くねわくくざりよ成なり

其二十二

大湯村おほゆむら前まへの谷やより金津かねづの越野こしの約やくヶ嶽たけの涼谷りやうやに入いるり  
三里さんりにりり化石溪かせきせきと名づくる所ところあり艸本しよくほんとすす虫羽むしうの



珠山とて、書画凡流の人のりし其家に亀石は菴石一塊  
 の石上自然の小龜の形ありて工にせざるごとく長尾中村  
 氏烏帽子石は菴石の白石の緑を以て奇なりしが今  
 初尾某の家に贈るとりて堀の内某の家一奇石は菴石  
 形上下六面皆表の如く床頭の弄玩妙なりとて今  
 家の姓名を忘る予一年約ヶ嶺のゆをびく汝谷の石に  
 考石は真黒光沢形似蘆山丈漠布の勢あり故蘆山  
 石と名づく尤に思をわく



乳石 盤石

乳石

音穰石

如白玉氷柱

乳石の長びら



廬山石

崑崙位士才  
石几席空生  
玉一堆  
若不承山之上  
得會澄星宿  
海中事

廬山石記

如亭題



長短亦形言  
以亦似老君之  
言大矣哉物  
誅年定於高  
下而人誠于  
分於長短從  
以目之所置  
多而變焉已  
在我墨奇心  
於亦丈之人  
而後正嶽小  
於指矣禹我  
目於蠢尔之  
出地日之解  
月毛以正於  
標社矣

